
IS インフィニット・ストラトス 漆黒の翼の二人 ～篠ノ之姓の転校生～【後編】

夕凧 渚 / 藤原 ゆきかぜ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 漆黒の翼の二人 篠ノ之姓の転校生 〔後編〕

【Nコード】

N7573W

【作者名】

夕凧 渚／藤原 ゆきかぜ

【あらすじ】

義理の姉、束は言いました「学園に行かないかい？」と。そして主人公は再会する。幼い日を共に過ごした一夏と筭。千冬と共に渡ったドイツでの旧友ラウラと。（注意 ラウラは最初からオリ主にデレてます。カップリングはタグで）

タイトルの通り、ラウラがメインの創作です。ちょっと崩壊気味なんでご了承をば。あと、作中で何度もドイツ語を使用しますが、自

分は全くの素人なので間違っていれば指摘をお願いします。

前編はこちら【<http://ncode.syosetu.com/n00033r/>】

1話 学園防衛戦 1

戦況の推移は微妙なところである。

防戦である以上、攻勢に出る必要はないのだが――。

『箒、出過ぎだ！』

雑音と轟音混じりの回線。

一夏の叫びと同時に、紅い尾を引く箒の紅椿を追って、白光を纏った一夏の白式が追う。

『分かっているが――』

「防衛ラインを出た一夏と箒を援護しろ！ 同時に敵を近付けるな！」

「了解！」

超大型ドーラ戦域征圧砲『絶対砲撃』アフソリユート・ファイアに三式弾装填――Aufn ahmen！

強烈なマズルフラッシュがチリチリと髪を焼く。

ISでさえも防ぎきれない反動で後退しつつ、弾を目で追う。

数秒の空白。

……敵ISを探知して、VT信管が作動。対空砲弾の本領発揮、弾幕を形成して一瞬敵ISの動きを止める事に成功――。

『こちら一夏と箒、防衛ライン内に戻った！』

よし……。

『こちら きりしま！ 敵を海上に追い込んでくれ、トマホークで片付ける！』

トマホーク……？ 有効性は――あるのか？ いや、その前に――海自がトマホークを導入したなんて話は聞いてないぞ？

『問題は後回しだ……。試してみる価値はあるだろう――各員、一挙攻勢に出ろ！ 敵を海上に追い込むんだ！』

千冬さんの指示で、一気に学園所属の全ISが蒼空に舞い上がる！

自然に先頭は一夏と箒。その後方に近距離戦を得意とする教師陣。中ほどには、移動した山田先生を軸とする中距離戦団。そして――後方には自分やラウラ、セシリアを軸としての後方支援。

計31機のISが一拳に飛ぶとは――前代未聞のことだろう。

「セシリア――狙撃は任せた。前に出る」

『りよ、了解しましたわ!』

少しばかり高度を上げ、戦域制圧砲での曲射を始める。

接地砲撃よりも、今の状況の方が反動がマシなので――4秒1発の連続砲撃を続ける。

残敵は10に満たないが、戦果は一夏が1とシャル・箒共同で1狙撃砲撃班共同2の計4機のみ――大多数が健在……。

――せめて、もう少し数を減らさなくては……。どうするか。

「……行こうか」

ふっ――と、隣に現れたラウラ。

呼ばずとも、声に出さずとも……一瞬で汲み取ってくれたのか。……ああ、行くか」

2話 学園防衛線 2

「最後尾でシールドを張っている2機を最低でも大破させる」

『了解した』

トマホークを放つても、敵のシールドを破壊しておかないと意味がない。

「織斑先生、最接近して敵の防御陣を破壊します。許可を」

散発的な射撃は続いているが、大半はシールドに防がれている。

『……………』

少しばかりの間が空いて。

『篠ノ乃とボーデヴィツヒの突入を可能な限り援護し、敵の防御陣を破壊してトマホーク攻撃を可能にせよ』

シュトゥルム・ゲヴェーア
近距離突撃銃S——弾倉装着。リロード……。

『各機、攻撃始め！』

「行くぞラウラ！」

『応！』

敵の標的になるよう、あえて直線航路を選んで。

アイギス
絶対防御壁を増設エネルギーに直接繋ぐ。

ただ前へ前へ。

迫り来る攻撃全てを受け止め。

後方からの攻撃は寸分の狂いもないが——全てシールドによって防がれている。

縮まる距離。

何が効果的な攻撃か——そうだ。

「ラウラ、下へ！」

どちらを追ってくるか——いや、どちらに反応するか。

ラウラに反応すれば、自分に背を向ける事になる。

自分に反応すれば、ラウラに背を向ける事になる。

それはつまり、対IS戦において最強クラスの兵装を持つ2人に

は。

「『もらった!』」

1機だけ、こちらに振り返る。

しかも、ご丁寧なことにも――。

『貸し一つ、な』

1機をワイヤーブレードで拘束し、もう1機を慣性停止結界で完全に止めて見せた。

まあ……もって数十秒だろうが。

「砲撃後、すぐに絶対防御壁を作動させろよ!」

敵ISの背にピタリと砲口をあてがって――。

連続する4つの爆発音。

2つは、2つの砲門から対IS用徹甲弾が放たれた音。

その後の2つは、敵ISに衝突して爆ぜる音。

「ラウラ――無事か?」

『ああ……問題ない』

レーダーから2機は消えた。

「宛、きりしま。敵最後尾防御陣の破壊を確認。攻撃のチャンスです」

『了解した――トマホーク、攻撃始め!』

レーダー上、きりしまから現れた点がこちらへ向かってくる。

残った8機は今も戦域からの離脱を図っている――。

セシリアが放ったものか――蒼い光が、一寸横を通り過ぎる。

相変わらず、寸分狂わぬピンポイントな狙撃で――あれ?

敵は、避けもせず、防御もしなかった。

エネルギー切れ?

無人機にあるまじき結果のはずだが……。

『到達5秒前、総員回避!』

千冬さんの怒号で教師陣が距離を取っていく中。

「ラウラ——」

『ああ。いささか気になるな。完全計算で動くはずの無人機が——
どうして』

薄い黒色をした絶対防御壁の光が一つにつながって。

「無人機も、まだ完全じゃないのか」

『それが分かったただけでも、十分な成果だろう』

満足げに頷くラウラ。

そのすぐ横をトマホークが掠め。

『見届けるとするか』

「だな。トマホークの威力を見れるなんてそうそう無いだろうしな」

結果を言おう。

直撃

である。

エネルギー切れのISの脆さは知っていたが、無人機には不明点も多い。そんな無人機にもエネルギー切れがあると初めて知った。そして今、戦闘後の休息もないまま、再び会議室に集められた。

「諸君らに伝えなければいけない事項が2つほどある」

普段とは違う千冬さんの声色。どこか申し訳なさそう——そんな感じで。

それを悟ったのか、ざわざわとし出した。

「IS学園の無期限休校と——亡国機業の所在が判明したため……
ここが前線基地となることが、決定した」

3話 鷹月静寐

「IS学園の無期限休校と——亡国機業の所在が判明したため……
ここが前線基地となることが、決定した」

……無期限、休校？ 亡国機業の所在判明？

ざわめきがより一層大きくなり——。

「説明を始める。私語を慎め」

決して大きな声ではなかったが。

「よし。説明を始める」

千冬さんの背後のディスプレイが太平洋を中心とした画面に切り替わり。

「つい先程入った情報だ。先日大西洋で国籍不明の潜水艦が発見された。その潜水艦は大西洋から北極海回りで太平洋に出現。アリクーシャン諸島の南で消息を絶った。さらに、硫黄島周辺で発見された潜水艦と小笠原諸島沖で合流。その後——」

画面が一枚の写真に切り替わる。

「——グローバルホークが発艦中の様子を捉えた。これは間違いない——」

全体的に細いが、片腕だけ異様に巨大な……そう、間違いない。

「ゴーレム？……」

「そうだ。水中から発艦しているとみて間違いないだろう」

「そうか……亡国機業の所在が判明しないのは、水中に存在していたからか。」

しかも、北極回りで大西洋から太平洋に出れるとなると——原子力潜水艦と見て間違いないか。

「潜水艦2隻は硫黄島の西2万キロで消息を絶った。そして……
そして……？」

かなりの空白が空き、千冬さんは静かに語る。

「亡国機業は……我々IS学園に対し宣戦布告。先程の戦闘の直前

に受理した」

なっ……！？

「至極当然の判断だな。各国最新鋭機が運用されているこの学園を最初に潰せば、あとはずっと楽になる」

ポツリと、隣のラウラがつぶやく。

「なら、俺らが亡国機業を壊滅させれば！」

一夏が拳を握りしめつつ、千冬さんを見据えて大きめな声で。

「そうだ。我々は防波堤にならねばならん。しかし、一般生徒を巻き込むわけにはいかないし——戦う意思のないものを戦わせようとも思っていない」

そりゃそうだ。世界を守るためとは言え、一般人を守れないようでは意味がない。

「一度生徒たちは教室に戻れ。ここからは職員会議だ」

千冬さんも——つらいのか。

一夏に対して度々あったのとは違う溜息。

静か……だ。

普段は騒々しいくらいの1組が、今日はどこまでも静か。

先頭でドアを開けた一夏も、開けてしまったことを後悔しているかのようで。

どうしたものかと、ラウラと顔を見合わせていると——。

「——話があるの」

不意に立ち上がったのは、一夏曰く「クラス一のしっかりもの」と評されている鷹月静寂で。

「1組全員、学園に残ると決めたの」

4話 急造IS

1組全員の意味は固く。

「そうか……教育者としては、帰すのに越したことはないのだがな」
会議室。千冬さんへの報告を終えたところである。

「これで1年は約90人か……2組5組と続いて1組も——代表候補生がいるクラスばかりではないか」

「つてことは、鈴と簪が働きかけた——のかな？ 知らんけど。」

「織斑先生、2つほど言いたいことが」

「なんだ、言ってみろ」

「鹵獲コアと整備科用コア無しISを流用し、少しでも手数を増やすべき——それと、万が一に備えて防空火器の設置を」

鹵獲コアは確か3つ。急ごしらえと言っても、ISが3機追加できるのは悪い話じゃないと思うが……。

「こちらも手が回らなくてな。急造ISの件は頼三が主となって行なうなら許可する。しかし……防空火器の設置は私の一存では無理だ」
そうですよねー流石に。

「後で山田先生を向かわせる。それまで待っている——ああ、急造ISの搭乗員はこちらで決めておく」

たった数十分で会議室は指令室へと様変わりし、ちらほらと3年先輩の姿も見える。

あつと……あの姿は。

「ラウラ、ちよっと待ってて」

「ん？ ああ……」

「布仏先輩」

「あら篠ノ乃君。何か用？」

千冬さんに許可されて、自分が主になって急造ISを造るのはいいが——流石に一人では無理がある。そこで、だ。この人に聞けばあれが分かる。

「整備科の生徒は何人ほど残っていますか？」

「確か……半分以上が残ってると思うわ」

半分か——それなら十分。

「何？　もしかして整備科集めた方がいい？」

「そのうち、お願いしますね。では」

さて……整備科にあるコア無しISはラファール・リヴァイヴと打鉄が2機ずつ。

いっそ、知り合いとかが選出されたら、専用に2機をアセンブルしてみるか？

「そうだ頼三」

「ん？　どうしたラウラ」

「先程連絡があつてな、欧州からの派遣部隊へはシュヴァルツェ・ハーゼの第2分隊第1班を割いたそうだ」

ってことは、ガーランド、ハイドリヒ、メルダース、ミルヒがここに——。

「懐かしい顔が揃うな——ま、そう思っていられるのも最初だけかな」

「ははっ、確かにそうかも知れんな。ま、一度ゆっくりと話したいものだな」

さて……また整備科籠りが始まるのかねえ。まあ4人が到着する時くらいは出るけどさあ。

5話 整備科集合

「では……説明を始めます」

整備室横の小会議室。

布仏先輩に頼み、ここに残っている整備科の生徒を集めてもらった。

「現在の状況は周知のとおり。織斑先生の許可でISを急造することが決定しました」

ザワツと。少しの私語が混ざる。

無理もないか。

整備訓練しか受けていないのに、急に製造となれば。

それより——最初に言わなくてはいけない事がある。

「そして……ここからは一部学園の機密が含まれる。機密保持が不可能と思うのなら速やかに退室願う」

と言え。

事の重大さを誰もが察知したようで、誰もがこちらを真剣な目で射る。

誰一人の退室者はいない。

「——では、説明に入る。ごくごく簡単に言えば、訓練用コア無しISから模造コアを抜き取り、学園で鹵獲したコアに入れ替える。その後、3名の搭乗者に合わせて細部改造を行う……質問は？」

「はい！」

手を挙げたのは最後尾、布仏（妹）。

「えとー、えとねー……これの責任者は？」

「自分、篠ノ乃頼三が中心になってこれを行う。それが絶対条件」
「ういー。了解」

布仏（姉）が布仏（妹）に何か言いたげだ。おそらく口調のことだろうか。

「それでは、作業工程についての説明に——」

と、次へ移ろうとしたとき。

ポケット内の携帯がブルブルと振動する。

「……小休止、5分後に再開する」

そう言い残し、会議室の外に出る。

「はい、篠ノ乃です」

「頼三か。搭乗員3名の選抜が終わった。以外にも整備員や糧食班への志願は多かったが、IS搭乗員への志願は意外と少なくてな…

…ま、すぐにそちらに向かう。では」「はい、了解しました」
さて……。

3名、か。面識ある人だと楽なんだけどねえ。

6話 Rafale・Revive改・TIB

千冬さんから送られてきた情報を端末で確認……。

各学年から1人ずつか。

同じ学年同士で組んだ方がいいだろうな。

ってことで――。

「適正については把握している、とりあえず――コアの移し替えが終わるまで待つてくれ」

学年ごとに割り振るとは言ったが……1年は自分と布仏（妹）だけなのだ。

まあ、自分はそのらの一般生徒よりかは整備改造に自信あるし、布仏姉妹は言わずもがな。十分すぎるのだ。

やることも然程複雑でもない。

模擬コアに設定されている各部との結合を解除し、鹵獲したコアに各部との結合を行う。

本体はこれで十分。

で、肝心の1年生搭乗員は――。

「うん。なんか――ごめんね」

我らが1組委員長鷹月静寂なのである。

適正の方は流石委員長と言うか……ほぼ全てがCランク、射撃と高速移動がC+と。総合のIS適性はCで代表候補生レベルに一步劣るが――一般生徒としてはかなりのレベルなんだろう。

「ところで鷹月。なんか希望はあるか？先輩2人はそれぞれ打鉄とラファール・リヴァイブをそのまま使うんで、どっちも1機ずつ余ってるみたいだし」

「えっと……その辺りは任せてもいいかな？」

ほいきたー！

許可出たからアセンブル決定、簡単な絵で布仏（妹）と打ち合わせ——のほほんさんと一夏は呼んでるが……ああ呼ぶべきなのかねえ。知らんけど。

「胴体装甲はラファール防御型、背部装甲とスラストもラファール。スラストへの接続部の出っ張りを削って、そこに打鉄の肩回りをくつつける。腕はマニピュレーターの反応がいい打鉄の使用足はラファール、それに打鉄の足回り装甲を装備。ラファールの足内部エネルギータンクをインテグラルタンクに変更して容量を拡大それに伴って足回り装甲の強化——本体はそんなものかな」

「おけおけー、了解」

エネルギーを上昇させ、打鉄特有の防御力を汎用性の高いラファールに付加。

でも、そのまま組んだらパッチワークみたいになってしまうか。

「色の要望は？」

「え！？ 別に……これと言って希望は——」

「じゃあ浅葱色かな」

浅葱、には控えめな人——って意味もあるからね。

よし……製造開始だ。コイツの名前は。

『ラファール
R a f a l e ・ R e v i v e 改 - T I B 』
リヴァイブ

6話 Rafale・Revive改・TIB（後書き）

TIBはThin Indigo blue——薄い藍色、浅葱色のことです。

7話 武装

前にも言ったが……。

然程複雑でもない工程。

手こずったのはスラスタ―接続部の長さを減らし、打鉄の肩回りを接続させた一連の作業程度。

さて……問題は武装面だ。

委員長鷹月の適性的にはなんでもOK——だろうが。そこら辺は……。

「出来れば——中々遠距離がいいかな。前に出て力になれると思えないし」

ホント、出来のいい子だと思うよ。個人希望よりも全体を見ての発言。

中々遠距離ってことは……狙撃銃・榴弾砲をメインとした長距離支援型として完成させるのがいいか。

狙撃銃と、近距離防衛用火器は整備科用のを拝借するとして、問題は榴弾砲をどうするか……。

……。

よし、作るか。近いうちに完成できなくとも、整備科流用武器で十分戦力にはなり得るはず。

こっちは布仏（妹）に任せて、こっちはこっちで作ろう——いや、造ろう？

別な場所で——と言っても、先程の隣部屋。

整備科には古今東西、拳銃を始め機関銃や機関砲。果ては列車砲の原図からトレースされた設計図面や資料が収められている。

ま、最新のもので20～30年ほど前のものであるが。

とりあえず、これらを参考にして作ろう。

参考とするのは——『フリーゲルファウスト』『21?ネーベル
ヴェルファ—42型』『82?BM-8』『17? K 18』『
ホ501(八八式7.5cm野戦高射砲)』

ちよいと古いがいいだろう。『82?BM-8』とかになれば、
故障の心配はほとんどないし、万が一の故障でもすぐ対処できるだ
ろう——多分。個人見解だけどね。

あ、後は精密砲撃用レドームを併設させた方がいいかな? 特に
『17? K 18』

さて——最初は構造自体簡単なフリーゲルファウストや82?B
M-8からやってみるか。

82?BM-8は背中に常備配置でいいかな。

流石 自分!

……すいません、完成の嬉しさです。

自分で言うのもなんだが……流石篠ノ乃東の弟か。まあ、血の繋
がりは無いけど。

だって……強度不安から未完成の『17? K 18』以外全部
完成させたんだもん……。

まあ、強度不足と言うより——反動をISでは抑えきれない、つ
まりIS側の強度不安。

これをRafale・Revive改-TIBに量子変換した状
態で送って……と。
インストール

にしても……形式名じゃ固いねえ。まあ本人に考えてもらえばい
いか。さて、戻るか。

「あ、おかえりなさい」

戻ってみれば、他学年の整備科生徒は引き上げており、最後まで残っているのは1年だけ。

そして、こうやって律儀に声をかけてくれるとなると……。

「おゝし、できたお！」

「ごしごしと顔に付着したオイルをタオルで擦りつつ、布仏（妹）がこちらへ向き直る。」

「ってか、今まで何かしていたのか？」

「たっちゃんたっちゃん、IS起動して！」

「おや、新しい愛称か。」

「え？ うん、分かった」

そして、それを意に介さない……よし、今度そう呼んでみるか。

一瞬の輝きの後、姿を現したR a f a l e ・ R e v i v e 改・T I Bのほっそりとした腕には。

「完成、手甲付き大型ナックルだよ！」

肘辺りから腕を覆う大型の手甲、マニピュレーターそのものを覆う大型のナックル……これを、布仏（妹）が？

「近接攻撃は手甲で防げます！ そのままナックルで攻撃もできます！ えへへっ凄いでしょ、私」

「こいつは確かに凄えな……」

……まあ、弾丸を防ぐのには向かないが——近接格闘に突入すれば十分効果を発するだろうな。

「んじゃ、自分の作った武器の試験もするか——よし、アリーナに出ようか」

8話 模擬戦と慢心

陽が落ち、薄闇に包まれたアリーナ。

『では——始めるか』

「——ああ、始めてくれ」

模擬戦形式で各武装の様子を見る。なので、17？ K 18も装備させている。

……武装が多いと扱いにくい、との委員長自らの希望でホ501（八八式7.5cm野戦高射砲）は装備せず。まあ、どこかで使うと信じよう。

模擬戦の相手はラウラ。少々手こずるかもや知れんが、無人機を相手にするよりかはずつと楽だろう。それに加え、実戦形式重視で照明は一切使用しない。

『持てる力、存分に発揮してみる』

『……行きます——！』

2機のISが地を蹴り、黒い絵の具をぶちまけたような空へ飛翔する。

スペック通り、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンが鷹月のラファール・リヴァイブ改・TIBを見る間に引き離す………掛かっただな、ラウラ。

『鉄嵐！』

とは言っても、鷹月自身が兵器展開に慣れてない。言葉に出してしまうのはなあ……。

ともかく。背中に備え付けられた8つのレールの上下にロケット弾が展開され、計16発のロケット弾がラウラの背後から襲いかかる——。

ま、それに当たるラウラでもなく。

無誘導なのは痛いな。

そして、82？ BM-8は『鉄嵐』と命名ね……メモメモ。
カチューシャ

すぐさま反撃に移るラウラ、大口径レールカノンを構えほんの数秒——いや、秒未満で狙いを定めて砲弾を放つ。

……こつちも無誘導。流石に鷹月も回避は出来る。

そして、その砲撃後の硬直を狙って。

『時雨！』

4基の21？ネーベルヴェルファア42型を2基ずつ上下に連結し、連結部を持つて。

計120発のロケット弾が放たれるも——ラウラの停止結界の前では無力か……。

あ、21？ネーベルヴェルファア42型は『時雨』か。

ここでラウラが急接近、ワイヤーブレードで拘束してのプラズマ手刀の斬撃……そのまま真つ逆さまに落ちてゆく鷹月——ん？…

…いや、違つな。ただ落下はしていない。

『……空^{そら}返^{かへ}』

落下しつつも、弾倉を装備したセミオートのフリーゲルファウストを構え。

『甘い………』

難なくそれも停止結界で防ぐラウラ。

『……っ！？』

『………雪崩』

地に降り立った鷹月が、砲身長7メートル強の17？ K 18を構え。

……教えた通りにしているな。空中であれを使つたら、反動で制御不能に陥る可能性がある、地に据え付けて使用するのが安全——と。

『行きますっ！！』

『来い！ されど停止結界の前では無力！』

あー……。

ああやって、ラウラが高らかに宣言すると——大抵打ち破られるんだよな。

しかも今回は——ラウラが敵に対して躊躇なく放つ、対IS徹甲弾の威力を身を持って知ることになりそうだ……。

ラウラの大口徑レールカノンと比べて桁外れの轟音に、排煙でアリーナの地面が隠される。

一方のラウラは。

「——！？」

まず1発目の威力に驚き、されどそれを停止結界で止めて見せる

——も、その推進力を完全に相殺することはできず、そこを次弾に襲われて。

「ぐはああ！」

集中が途切れ、対IS徹甲弾2発を喰らうことになった。

アリーナのシールドバリアを解除し、そこからすぐにIS展開。

すぐさまラウラの元へ駆ける。

「……大丈夫か？」

「ああ……もつと対策を考えるべきだったな。実戦なら——死んでいたか」

「そうやって気付けるなら、問題ないな。よし、戻ろう」

「ああ」

連れ添ってアリーナの地面に降り。

「みんなお疲れさん、取り合えずこれで終わりだ。鷹月、戦ってみて気になる点はあったか？」

「ない……かな、とりあえず」

「よし、なら解散！」

9 話 哨戒網

鷹月・布仏（妹）と別れ、自室に戻ったのだが……。

「——これが、現状か」

端末に送られていた現段階での情報をラウラと見ているのだが。

「情報が枯渇しているな……自衛隊と米軍の連携が取れてない。小笠原諸島近海の発見以降の情報が無いとは」

ラウラそう呟き。

正直、自分らには発言力は無いに等しく——まあ部隊長であるラウラにはあるのだが、それでもなあ……。

自分の構想としては、硫黄島基地、米海軍第七艦隊と海上自衛隊第1護衛隊群第1護衛隊を使い、硫黄島基地を中心として北東と南西の2方向に空母を配置。哨戒機を飛ばし、哨戒網を構築すれば——

「それでは、万が一の会敵時に生存率が著しく低下する。ISに対抗できるのはISだけだ。忘れたか？」

むう……ラウラに駄目だしされた。

じゃあ、ISを用いて哨戒網を構築するのか？

とりあえず、この学園に何機のISが揃うんだろうか——確認しよう。

IS学園：専用機11機 量産機20機 急造機3機

アメリカ軍：専用機1機 実験機1機

ドイツ軍：軍用機2機

イギリス軍：実験機1機

ロシア軍：実験機1機

合計40機——実験機が多いな。しかもほとんどが学園にある専用機の実験機だし。

これを千冬さんはどう配置し、動かすのか。

20機・20機でIS学園とどこか——それこそ硫黄島か——に配置するのが妥当か。

「——教官の考えに間違いはない。それよりも、どう敵を殲滅するか考えるべきじゃないのか」

「それも——そうだろうが、原潜をどう破壊するべきか……」

下手に破壊だけを見ると、放射能問題が出てくるし——それを考えると、未だ実態がつかめない亡国機業の内部を探るためにも、捕獲するのが妥当なのか。

もしくは——向こうのIS操縦者、スコール、エム、オータムを原潜が存在する海域から引き離し、原潜内に部隊を潜入させ、占拠。原子炉を停止させれば、破壊も捕獲もできるはず。

「それは良いかもしれない——が、戻る場所を失った戦士の強さは半端なものじゃないぞ」

「そう言うラウラはいい案あるか？」

「いや——ない……。まあとりあえず、哨戒網構築と原潜破壊案は教官に送っておこうか」

「そうだな。でも……原潜で内部に潜入するとなれば、誰を出すんだろうな」

素朴な疑問だったが——すぐに答えは出た。IS学園に集結する各軍で特殊部隊はただ一つ。

「……………」

「……………」

ラウラも気付いたか。

「まあ、その時になれば分かるさ。もし——ラウラが行くことになったら、自分も行くからさ」

な？ と付け加えてラウラの頭を撫でて。

「さ、もう寝よう。寝られるうちに寝ないと」

ああ言ってしまった手前、何も言わなかったが——。

この先、誰が死んでもおかしくない。

そう。自分が死ぬかもしれないし、ラウラも……。

……。

嫌な想像に押しつぶされるのを予感し、考えるのを止めた。

10話 再会と苦悩

朝の6時から、空・海の両方から各国軍が集いつつある。揚陸艦や輸送機がやってきては、積荷を下ろして帰ってゆく。

そして、自分とラウラは。

「見えた——」

双眼鏡から目を離し。

黒赤黄3色ライン。ドイツ空軍所属のエアバスA310がフラップを全開にして高度を落としてくる。

「——そうか。了解」

学生としての顔ではなく、部隊長の顔で凜と佇むラウラ。左目に眼帯を装着し。

「ん……？ 来たのか」

「………おはようございます、ミュラー大佐」

この人は——器用なのかなんなのか。立ったままで寝ていた。

そうこうしている間に、エアバスA310は滑走路に降り立ち、誘導路に入る。

タラップで機体のドアと地が結ばれ、4人が降りてくる。

全員が黒の軍服に左目の眼帯。前から——ガーランド、ハイドリヒ、メルダース、ミルヒ。

「アデライーデ・ガーランド准尉以下4名、只今到着しました」

「御苦労。全軍到着後の別命あるまで待機——」

敬礼を敬礼で返し、そこまでを伝えてラウラは。

「——久しぶり、だな」

「「お久しぶりです、隊長！」」

こちら辺、ホント最初とは変わったな……。

「「ミュラー大佐もお久しぶりです！」」

「いや……お前らとは少し前にも会ってるだろ」

「おっと、そうでした」

「てへぺろ——って……ガーランドは一番精神的に幼いって聞くけどねえ。」

「そして篠ノ乃中尉、話はルーデル少尉から聞いています！」

あんの馬鹿……何て言いふらした。

「未長く爆発しやがれです！」

後ろの3人も、笑みを浮かべている……。

「ガーランド。同期の誼^{よしみ}でお前は不問にするが——」

隣にいるはずのルーデルを問い詰めようとしたが。

「嘘です！ 私は何も言ってますん！」

何も言っていないなら、どうしてミユラー大佐の後ろに隠れる。

………上下関係を見捨てる傾向にある隊員が多い。ミユラー大

佐が筆頭なのだが。

「……はあ」

こんな特殊部隊でいいのだろうか。

「——海洋汚染や放射能問題を防ぐ原潜破壊はかなり難しい。それが亡国機業側としてもカードになっている」

小さな会議室に集められたのは、自分とセシリア。千冬さんが出てきた一枚の紙を3人で注視している。

「もちろん、捕獲できるのならそれが一番いい。ただ——」

「それが簡単に出来るなら、私たちはここに呼ばれていない——と言っことすわね？」

「そうだ。そこで2人を呼んだ」

無言でセシリアと顔を見合わせる。

「最も素早いのは——狙撃による発令所のみの破壊」

『のみ』にアクセントを置かれた言葉。

「もしくは——IS対ISの戦闘中に特殊部隊を潜入させ、内部を

制圧。その後捕獲」

「自分とラウラに、動けと」

「危険すぎるのは重々承知している。ただ……他に手が思いつかないんだ」

くっ……と、頭を抱える千冬さん。

そうだ。千冬さんだって、素人……ただ、IS世界王者の実績だけで対亡国機業の指揮を任せられて。

「……分かりました。シュヴァルツェ・ハーゼ第2分隊第1班を第2種戦闘配置で待機させるよう、ラウラに伝えます」

「すまない……もしものときは私も出る。それで許せとは言わないが――」

「指揮官がそんな弱気では駄目ですよ。世界最強の名が泣きますって」

【ダス・ライヒよりゲリラへ。特殊部隊の潜入に備え出撃機数を調整するよう。なお、ブリュンヒルデが出撃する恐れあり。オーヴァー】

【……了解】

11話 約束。

空は蒼く。

ぼうつと、ラウラと二人で空を見上げて。

戦いの、空を見上げて。

先程、全IS搭乗員とシュヴァルツェ・ハーゼ第2分隊第1班が集められ、作戦が伝えられた。

『哨戒機の情報を元に、当該海域へ進入。亡国機業部隊を敵原子力潜水艦から引き離し、その間にシュヴァルツェ・ハーゼが2隻の原潜に潜入。原子炉を閉鎖させた後、離脱。離脱確認後に原潜を破壊する』

と。

これが重要で、かつ難度の高すぎる作戦だとみんな分かっている。ラウラは言葉を発することはなく、自分の背に身を預けたままで作戦開始時間は未定。

哨戒機が亡国機業の原潜を発見できない限り、作戦は始まらない。

もし――。

「なあ……頼三」

呟くように。ラウラは言う。

「……どうした？」

「もし――もしも、このまま作戦が始まらなければ……」

つい。ビクツと反応してしまう。

「そうか。頼三も、同じ事を……」

死への恐怖か。

日常を手放す怖さか。

引き裂かれる可能性への恐怖……。

自分だって怖いさ。

でも。

「自分だって怖いさ。でも……自分らがやらなくちゃ、誰がやるんだ？ 放っておけば、亡国機業が世界を統べる事態になるかもしれない」

「分かっている。分かっているが——うう……」

ついにはガクガクと震えだしたラウラ。

まさか——戦闘ストレス反応じゃ？

いや、今はそれどころじゃない。

「ラウラ？」

ラウラに向き直り、その顔を覗き込む。

「私は——私は軍人だ。いつ戦地に赴くことになるのは承知しているが……私は、怖いんだ」

凜とし、強い意思を秘めていた瞳は——光を映さず。

「命令なら死ぬことは厭わない……ずっとそう思っていた。でも、頼三と出会って……日々を過ごして。私はこの日常を手放したくない。まだ……死にたくないんだ」

そこにいるのは、軍人じゃない。年相応の少女が、泣いている。

自分は……

「ラウラ——まだ、死ぬって決まっちゃいないだろ？ だから

……」

しっかりとラウラを抱きしめて。

ラウラの顔を乗せる首元が涙でぬれる。

「何があっても、生き残って、全部終わって——ここを卒業したら一緒に暮らそ。な？」

「うん……うん。約束、だぞ」

そうポツリと呟き、憑き物が落ちたが如くそのまま眠ってしまった。

「……ラウラは心配するなよ。自分が、護るから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7573w/>

I S インフィニット・ストラトス 漆黒の翼の二人 ~ 篠ノ之姓の転校生 ~

2011年11月16日18時07分発行